

## 眼鏡

- ① ひきだしから小さなめがねは現われてこんなにかいさい十歳のかお p. 10
- ② ゆつたりと夕映えの川は曲がりおり蔓やわらかな老眼鏡めがねを選ぶ p. 85
- ③ 眼鏡を外すちいさな仕草があなたにもあると思えり灯り消しつつ p. 180
- ④ ほんとうに似合う眼鏡はどこにある 風のいろした眼鏡をさがす p. 187
- ⑤ 産道を通らず生まれてきし子どもは根性ない子と姑に言われき p. 37
- ⑥ 婚家には父の病を告げぬことわれは選びて今朝も水撒く p. 43
- ⑦ 椎茸が耳のかたさに戻るまで義母の俳句の助詞を直せり p. 83
- ⑧ 子の職業、敷地面積つけ足して自己紹介を義母は終わりぬ p. 135
- ⑨ 初めての親の襤褸を買いに行く秋の日夫は僧の目をせり p. 30
- ⑩ 白銀の刃は冴え冴えと置かれて間もなく眠る子は切られゆく p. 57
- ⑪ 海老チリを食せばいつも祖父は言う蟬の抜け殻食べし戦地を p. 32
- ⑫ 調査員の手元カチカチ鳴る真昼「自転車1」のわれも通れり p. 15
- ⑬ 新しき六馬力なる空調機付けられ六頭立てのそよ風 p. 29
- ⑭ ゆさゆさと葡萄の蔭も揺らしつつ木を連れ帰る両腕に抱き p. 51
- ⑮ 下乗なるところで夏の帽子脱ぎ透明な馬を待たせて祈る p. 90
- ⑯ ムンクの「叫び」の目から鼻から泡立ちて蓮根天婦羅からりと揚がる p. 128
- ⑰ 知らぬ人と特売の蛸を話しつつ大きめの雌を一つずつ買う p. 128
- ⑱ 愛読者カードはらりと土の上に落ちて最後の章に入りゆく p. 179
- ⑲ 憩室がわれには二つあるという 自分の部屋を持たぬ私に p. 185
- ⑳ ボラードの点々とある岸壁にわれを座らせ父が夜釣りす p. 68
- ㉑ 爪のように切っても切っても生えてくる癌は父の声塗り替えながら p. 116
- ㉒ さびしさに淋しいとぼつり言いしのち柿剥くように父が笑えり p. 119
- ㉓ 仔猫にも父にも母にも与えたい母乳と思う雨に濡れつつ p. 122
- ㉔ もう咳の起こらぬ朝が父に来てはなびらのような銀髪に触る p. 154
- ㉕ 今日よりは父の使わぬ石鹸の続きを母が使い始める p. 155
- ㉖ ぼたぼたと落ちくる点滴見上げつつ去年見上げいし父の目となる p. 190

## 物と言葉

## 義母・家族

## 父